

## 暴走するトランプ大統領と対決する米国の将軍たち

渡部悦和

黒人のジョージ・フロイド氏が警察官の暴行を受け死亡した事件に端を発する人種差別抗議デモは、ドナルド・トランプ大統領と米国の将軍たち（退役した将軍を中心に一部現役の将軍を含む）の対立を鮮明にした。国軍の最高司令官である大統領と将軍たちの対立は、政軍関係のあるべき姿、多民族国家である米国における分断の深刻さ、軍隊内における人種差別の問題などを改めて提起している。そして、この対立は11月の大統領選挙に少なからざる影響を与えることになる。

トランプ氏を批判している将軍たちは、ジェームズ・マティス前国防長官（元海兵隊大将）、ジョン・ケリー元大統領首席補佐官（元海兵隊大将）、ジョン・アレン元海兵隊大将、マイク・アレン元統合参謀本部議長（元海軍大将）、リチャード・マイヤーズ元統合参謀本部議長（元空軍大将）、マーチン・デンプシー元統合参謀本部議長（元陸軍大将）ら多数にのぼる。

特に目立つのがマティス前国防長官だ。彼は、トランプ大統領のシリア政策に抗議して2018年12月に国防長官を辞任したが、それ以来注意深く沈黙を守ってきた。しかし、彼は「ドナルド・トランプは、米国民を団結させようとしない、団結しようとするふりさえしない、私の人生で初めての大統領だ。彼は私たちを分断しようとしている。私たちは、成熟したリーダーシップのない3年間の結果を目撃している」とデモに関する大統領の言動に対し異例の厳しさを非難している。

### 「団結には強さがある」：マティス元国防長官の衝撃の大統領批判文書<sup>1</sup>

マティス将軍の大統領批判文書 “In Union There Is Strength” の主要点を要約して以下に紹介する。そこに、マティス大将のトランプ大統領に対する強い怒りと米国人の団結を促す強い信念を読み取ることができる。

〈私は今週に展開されている事件を見て、怒りそしてぞっとした。「法の下での平等」は、連邦最高裁判所の判例に刻まれている。これはデモ参加者たちが要求している当然の権利だ。それは健全で統一された要求であり、私たち全員が享受できるものでなければならぬ。この抗議活動は、何万人もの良心的な人々によってなされており、彼らは、人民（people）としての価値観と国家としての価値観に従うことを主張している。

私は50年ほど前に軍隊に入隊したとき、憲法を支持し擁護することを誓った。同じ宣誓をする軍隊が、いかなる状況下でも、同胞市民の憲法上の権利を侵害するよう（大統領に）命令されるとは夢にも思わなかった。私たちの都市が「戦場」となり、軍隊が

---

<sup>1</sup> General Jim Mattis, “In Union There Is Strength”, Hoover Daily report, <https://www.hoover.org/research/union-there-strength-0>

その都市を「制圧する」ように命じられることを、私たちは拒否しなければならない。米国内では、ごくまれに州知事から要請があった場合にのみ軍隊を使用すべきである。

ワシントン DC で私たちが目撃したように、軍隊を使って(デモに)対処することは、軍と市民社会の間に間違っただけの紛争を引き起こすことだ。軍隊を使うことは、男女の軍人たちと、彼らが守ることを誓った社会(彼ら自身もその一部である)との間の信頼の絆を侵食する。公共の秩序を維持することは、自分たちのコミュニティを最もよく理解し責任を負う州および地方の文民の指導者にかかっている。

私たちは、抗議に対する対処を軍事化すべきではない。私たちは共通の目的のために団結する必要がある。それは私たち皆が法の前で平等であることを保証することから始まる。ノルマンディー侵攻の直前に軍当局が兵士たちに与えた指示は、「私たちが破壊するナチスのスローガンは『分裂と征服』だ。私たち米国人の答えは、『団結には強さがある』」というものだ。私たちは、この危機を克服するために、私たちが政治よりも優れていると確信して、その結束を呼び起こさなければいけない。

ドナルド・トランプは、米国民を団結させようとしない、あるいは団結しようとするふりさえしない、私の人生で初めての大統領だ。代わりに、彼は私たちが分断しようとしている。私たちは、成熟したリーダーシップのない3年間の結果を目撃している。私たちは彼なしで、私たちの市民社会に固有の強みを利用して団結することができる。これは、過去数日で示されたように、簡単ではないが、私たちは、仲間の市民に借りがある。私たちの約束を守ろうとした過去の世代に、私たちの子供たちにも責任がある。私たちは、この試練を乗り越え、より強く新たな目的意識と相互の敬意を持つことができる。

(新型コロナの)パンデミックは、地域社会の安全のために究極の犠牲を惜しまないのは、米軍だけではないことを示した。病院、食料品店、郵便局、その他の場所にいるアメリカ人は、同胞や自国のために命をかけている。私たちは、ラファイエット広場で目撃した行政権の乱用よりも、私たちの方が優れていることを知っている。私たちは、憲法を愚弄するような公職者を排斥し、責任を問わなければならない。それと同時に、私たちはリンカーンの「より良い天使」を忘れてはならず、彼らの声に耳を傾け、団結しなければならない。

新たな道を歩むこと、つまり、建国の理念のもとの道に戻ることによってのみ、私たちは再び国内外で称賛され、尊敬される国になるのだ。)

## なぜ将軍たちはトランプ大統領の言動に反対するのか

### ● 治安維持のために統合参謀本部議長に軍を指揮させることの異常さ

今回、トランプ氏に対して批判の声を上げた元将軍たちの大部分は、軍を退役してからずっと政治的発言をあえて控えてきた人たちだ。私はとくに、2016年の大統領選挙の際に、「軍人は政治に関与すべきではない」と沈黙を守ったデンプシー元統合参謀

本部議長が反対の声を上げたことに驚かされた。

彼らの反対の理由は、トランプ大統領の言動が合衆国憲法や軍の本質を侵害するものだったからだ。トランプ大統領の驚くべき失言は、「マーク・ミリー統合参謀本部議長をデモ対応の責任者に据える」と州知事らとの電話会議で発言したことだ。統合参謀本部議長は米軍の制服組トップである。合衆国憲法では、各州内の治安維持は州知事が警察や州兵を使って対処することになっている。この原則は「民警団法」という法律に反映され、連邦軍の関与を禁じている。しかし、トランプ氏は、連邦軍の投入を表明した。それも軍のトップに軍を指揮させて対処しようというのだ。

連邦軍を出動させるためには、「民警団法」の例外として制定された「反乱法」に基づき大統領が連邦軍を派遣する場合のみだ。そのケースは、国内の治安が内乱状態になり、警察や州兵の能力を超える最悪の場合のみだ。しかし、「現在のデモの状況は軍を投入する最悪の状況ではない」と大部分の米国人は思っている。それにも関わらず、軍の投入を早期から表明するトランプ氏に反発したのだ。

さらに特筆すべきことがある。シビリアンコントロールが重視される米国においては、現職の将軍が大統領の命令に背くことは稀だが、ミリー統合参謀本部議長は大統領の意向に反対したと伝えられている。

### ●軍における人種差別は組織を崩壊させる

合衆国憲法で規定されている「法の下での平等」は、軍隊においても非常に重要だ。米軍において、肌の色の違いを理由に差別をしてはいけないということは常識である。米軍は米国社会の縮図であり、人種のるつぼと言ってもよい。白人のみではなく、黒人、ヒスパニック、アジア系、イスラム系など多様なバックグラウンドを持った軍人で米軍は構成されている。軍隊の構成員には規律、団結、士気が求められる。人種差別は、規律、団結、士気を著しく阻害するので、軍隊内では人種差別的言動はタブーなのだ。将軍たちが人種差別に反対するのはこうした事情がある。

筆者には人種差別に関連して胸の痛くなる思い出がある。ある在日米陸軍司令官（彼は黒人の少将だった）が日本での任期を終え帰国することになり、お別れパーティーを開催した。その際に、彼から「私は、米陸軍において少将にまで昇りつめたが、黒人であるが故の差別はあった」と悲しそうな顔で打ち明けられた。改めて人種差別の根深さを痛感した瞬間であった。

軍における人種差別は組織を崩壊させる。だから、多くの退役将軍たちがトランプ氏の人種差別的な言動に反発するのだ。

### おわりに

軍人は、上司が人格識見ともに優れた人であれば快適に勤務できる。しかし、トランプ大統領のような毀誉褒貶のある指揮官に使えることは非常に難しい。トランプ政権の

3年半の間に何人の元将軍や現役将軍が去っていかざるを得なかったことか。ある者は更迭され、ある者は自ら辞任していった。マティス国防長官、ケリー首席補佐官、H. R. マクマスター国家安全保障担当大統領補佐官、ランドール・シュライバー国防次官補（インド太平洋安全保障問題）など、愛国心に満ちた優秀な軍人たちだ。改めて政軍関係のむつかしさを痛感する米国の状況だ。

人種差別抗議デモは、11月の大統領選挙を睨みながら容易に収まりそうもない。トランプ大統領が仕掛けた米中新冷戦という重要な時に、米国の結束、米国を中心とした民主主義諸国の結束が必要な時に、米国の分断は中国を喜ばせるだけだ。我が国にとって同盟国である米国の混乱は、経済上も安全保障上も望ましいことではない。我が国は様々なケースを想定しながら、それらに最善の備えをしなければならない。